SHINWA

心和新聞

阪神淡路大震災 あの時 そして今

稲岡志帆 植田璃子
楠本愛羽 小柳彩珠

玉木雄一郎さん お話を伺いました

玉木さんは、東日本大震災を経験されています。とても怖く、当時いた東京のビルが大きく揺れたそうです。津波は映画のCGのようで高さが30m。建物が倒壊しました。この時、玉木さんは「水の力はすごい」「走って逃げられない」と改めて津波の怖さを実感したそうです。

1960年5月23日午前4時すぎ(日本時間)、チリ南部でマグニチュード9．5という観測史上最大の超巨大地震が発生しました。この時の津波は、標高は三陸海岸で8mを越え、全国で死者139人住家の流失・2830棟、半壊2183棟、浸水37，195棟などの大きな被害が起こりました。1946年に南海トラフ地震は、30年以内に起こる確率が70%だそうです。1946年に南海トラフ地震が起こったということは、もうすぐ起こる可能性が高いということがわかります。

気象庁によると、「南海トラフ巨大地震がひとたび発生すると、静岡県から宮崎県にかけての一部では震度7となる可能性があるほか、それに隣接する周辺の広い地域では震度6強から6弱の強い揺れになると想定されている。関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に10mを超える大津波の襲来」が想定されています。

ちなみに震度6強～7度は、立つことができないそうです。

また災害時に動物(ペット)が取り残され、沢山の動物が餓死してしまったそうです。農林水産省から、「レスキューは動物愛護団体の仕事」と言われ、ボランティアの負担はとても大きかったとお話しされていました。環境省は、このような被災経験をもとに、大規模災害時にはペットを連れて一緒に避難する、「同行避難」の徹底を呼びかけています。

同行避難とは自宅が危険になった時、飼い主が自分の安全を確保したうえで、ペットも安全なところに連れていくことだそうです。また、人間とペットが同じ空間で避難生活を送ることは、同伴避難といいます。多くの避難所ではペットと人間は生活スペースを分け、屋内や屋外にケージや柵で囲った専用スペースを用意するといった対応をとっているそうです。

「人とペットの災害対策ガイドライン」では、ペット用の持ち物などの優先順位の例を紹介されています。災害が起こったときに、どのように対応するかを家族全員事前に話し合っておくことも大切です。

「人とペットの災害対策ガイドライン」

【優先順位1】
動物の健康や命に係わるもの
- ペットフード(少なくても5日分)
- 常備薬
- ケージやキャリーバッグ
- 予備の首輪、リード(伸びないもの)
- トイレ用品
- 排泄物処理道具
- 食器　　　など

【優先順位2】
飼い主やペットの情報
- 飼い主の連絡先や緊急連絡先
- ワクチン接種状況や既往症などの情報
- かかりつけ動物病院の情報　など

【優先順位3】
ペット用品
- タオル、ブラシ
- お気に入りのおもちゃなど
- ビニール袋
- ウエットティッシュ
- ガムテープ、マジック　など

「人々を助ける自衛隊」

自衛隊の方にお話を伺いしました

自衛隊は・陸上自衛隊・海上自衛隊・航空自衛隊があります。陸上自衛隊は14万人・海上自衛隊は4万3千人・航空自衛隊は3万人います。

災害時には自衛隊によって仕事が違います。人命救助・入浴・給水・生活支援・水の供給・高空からの被害情報確認・遺体輸送・などの仕事があります。自衛隊の方は自分の家族の安否確認ができていないまま出勤することもあります。また、国民のために家族や自分のことなどを犠牲にして、国民のために働いています。そのため家族の協力がとても大切と話されてました。

陸上自衛隊の方のお話を聞きました。陸上自衛隊が災害時にする仕事は、人命救助・給水・入浴・生活支援などの仕事を主に行なっていたそうです。陸上自衛隊の方は災害現場に約3ヶ月間派遣されました。海上自衛隊の仕事は、神戸に水を供給することを主に行っていたそうです。海上自衛隊の基地は、液状化により被害者を受けたそうです。

航空自衛隊の仕事は、被害情報の確認・水の供給・航空機を使った人命救助などの仕事を主に行っていたそうです。このように災害の活動は自衛隊によって、仕事の内容が違っています。

次に災害時以外の活動についてです。

陸上自衛隊の主な任務は①我が国の防衛、②災害派遣、③国際平和協力活動です。平素の仕事はこの3つに区別できます。

その他に、外国の艦船・航空機等が日本の領海・領空に侵入するのを未然防止するために警戒監視を行う仕事、総務、人事、通信、補給・整備、輸送、会計、食事の提供等自衛隊の基地機能を維持する仕事です。

海上自衛隊の災害時以外の活動です。海上自衛隊は、国内外で災害が発生した場合に、災害派遣や国際緊急援助活動に従事し、被災者や遭難した船舶・航空機の捜索・救助・水防・医療・防疫(ぼうえき)・給水・人員や物資の輸送といった、様々な活動を行います。その他にも、海上からの侵略の防衛、海上交通の安全確保の業務を行います。機材の操作・離艦・整備の訓練を受けて必要な知識や技術を習得します。陸上基地において艦艇や航空機の活動およびこれに従事する隊員を支援します。災害発生時に航空機を出動させ、被災地の情報収集や救難活動を行っています。

次に、陸上自衛隊の災害時以外の活動です。陸上自衛隊は、外部からの武力対撃に対しての防衛活動・災害など緊急事態が起きたときの救助活動や治安活動・海上における警備活動など、国の安全や平和を守るために貢献する仕事です。また平和維持活動のため海外に派遣された場合は、復興のための施設建設や、支援物資・医療物資の輸送・医療や建築などの技術支援などです。

「リーダー」とは

玉木さんは災害を得て、「リーダー」は大切な役割だと感じたそうです。玉木さんによると、リーダーの仕事は主に2つあり、1つ目は「決断すること」2つ目は「責任をとること」です。このようなことから、災害が起きたときは「自分なりの判断をすること」がとても大切になります。

「天災は忘れた頃にやって来る」

自然災害はその被害を忘れたときに再び起こるもの。直接震災を経験したことがある人が少なくなってくる時にある、という意味が込められています。これは、科学者で随筆家の寺田寅彦による言葉です。

文：植田璃子

「みんなの期待」「ありがとう」「早く助けたい」

自衛隊の方が被災地に行って、思ったこと、感じたことについてです。

自衛隊の方は、「みんなの期待に応えられるように頑張ろう」という思いで被災地に行って救助活動などを行なっていたそうです。他にも、小さい子やお年寄りの方を救助したときに、「ありがとう」などとたくさん言われてとても元気が出て、もっと他の人を助けたいと思ったそうです。救助した人の中で、家族の誰かが見つかっていないと知った時は、「早く助けたい」と思ったそうです。

実際に探していた人が見つかったり、救助できた時には、家族が泣いて喜んでいて、自衛隊の人達も、泣いてよろこんだりしていたとお話しを伺いました。被災地に行って感じたことは、異様な雰囲気だったと話されていました。

自衛隊の方の被災地で見た現場、体験談についてです。自衛隊の方が救助や支援に行った時には、2階建ての家の1階の部分が潰れて、2階の部分が1階になっている家をたくさん見た、と話されました。他にも津波などで流された車の中や瓦礫の下にご遺体があって、行方不明者の探す場所が違うと言っていました。

災害現場に行った人にしかわからない体験談などのお話を伺いました。

災害前に出来ることは、家族と災害が起きた時のことについて考えること、1人3日分の食料を確保しておくことが大切だと話されていました。災害時にできることは、自分の命は自分で守る、自分の力で生き残ることが大切だと話されました。

文：小柳彩珠

災害前に出来ること 災害時にできること

DMATの中山伸一さんにお話を伺いました

DMAT「Disaster Medical Assistance Team」の略語で、大規模災害や多傷病者が発生した現場に、急性期に 48時間以内から活動できる専門的な訓練を受けた医療チームのことです 。チームは災害拠点病院に所属する医師、看護師、業務調整員などの5名で構成されます。

DMAT の役割や任務は、被災地域内での医療情報の収集と伝達、病院支援、災害現場でのトリアージ(傷病の緊急度や重症度に応じて治療優先度を決めること)、応急処置、搬送、広域搬送や臨時医療拠点における医療支援など多岐に渡ります。DMATに所属している医者は4535人、看護師は6435人、業務調整員は4554人います。

クラッシュ症候群について知ろう

阪神・淡路大震災の時、病院に搬送された患者の中で最も多かったのはクラッシュ症候群になった人です。クラッシュ症候群は、家屋や車体などの重量物による長時間の圧迫が原因で生じます。筋肉が圧迫されると、筋肉細胞が障害・壊死を起こします。それに伴ってミオグロビン(たんぱく質)やカリウムといった物質が血中に混じると毒性の高い物質が蓄積します。その後救助される時に圧迫されていた部分が解放されると、血流を通じて毒素が急激に全身へ広がり、心臓の機能を悪化させて死に至る場合が多いです。たとえ一命をとりとめたとしても、その後腎臓にもダメージを受け、腎不全で亡くなってしまう場合もあります。重量物に2時間から4時間以上挟まれると発生するといわれていますが、実際には1時間程度の圧迫で生じるケースもあります。阪神淡路大震災では、クラッシュ症候群になる患者は上半身より、下半身の方が多かったそうです。十分な観察、積極的な保温、調整業務、励ましと声掛け、情報収集が重要です。

災害の種類は3つあります。

自然災害と人為災害と特殊災害です。

自然災害は危機的な自然現象によって、人の命や人間の社会的活動に被害が生じる現象です。人為災害は人が起こした事故、自然破壊、環境汚染など、人間の何らかの行ないが原因となって起こる災害のことです。特殊災害は化学物質の漏洩など自然現象以外が要因となって発生する災害のことです。

「最後の砦」

災害時になると患者が増え、1人当たりにかかる時間が少なく、患者を1人1人丁寧に見ることが困難になります。病院では、断水や停電、ガスなどが止まり、救急治療室や手術室、MRIやCTなどが使えなくなり、病院に来た患者に包帯を巻いて怪我の箇所を抑えることぐらいしかできなかったそうです。

連絡をとりあう事が困難だった為、医師の人数が病院ごとに多かったり少なかったりと異なり、ある病院では医者1-12人で366人の患者、また他の病院では医者7人で1033人の患者を診察したという記録があるそうです。医療関係の方は当時、『最後の砦』としてそれぞれがベストを尽くしました。命をどう守るかが大切とおしゃっていました。1人でも多くの命を助けようという思いを持っていたのだと思います。

阪神・淡路大震災は初期医療体制の確保が困難で、今の救急医療レベルの医療が提供されていれば救命できたと考えられる「避けられた災害死」が500名存在した可能性があったと後に報告されています。このように阪神・淡路大震災は災害医療について多くの課題が浮き彫りとなったため、この教訓を生かし、各行政機関、消防、警察、自衛隊と連携しながら救助活動と並行し、医師が災害現場で医療を行う必要性が認識されるようになりました。例えば、阪神・淡路大震災の反省で東日本大震災の医療活動が進歩しました。また、令和の豪雨でDMAT以外の組織も手伝ったそうです。

中山さんはprevention(災害そのものをなくすこと)ができるように活動しています。災害時に私たちができることは、まず、自分の身は自分で守り(自助)、自力で行動します。阪神・淡路大震災では、97%の被災者が自力で脱出するか、家族、友人、通行人に救助され、それに対して消防に救助されたのはわずか1．7%だったことが報告されています 。このようなことから、災害時の援助活動では、いかに、自助や共助が重要である事がわかります。

災害に備えて準備をする事も大切です。助ける人は、怪我した人の観察や世話だけではなく、搬送先の被災・受け入れ状況、消防や警察など他機関との情報共有や調整などの業務も必要になります。適切な転送と病院の素早い医療体制が救命の鍵となりますが、調整業務に追われて患者の治療が行えないことがないようにしなければなりません。患者への十分な説明と励ましも必要となります。励ましや声掛けは、意識状態の変化を知るためにも積極的に行うことが大切です。現状やこれから行う処置についての説明、患者の意見やニーズの把握を考えながら活動、救出後に急激に意識状態が悪化する可能性があるので、家族の連絡先などの重要な情報を聞いておく必要があります。

文：楠本愛羽

マリ・クリスティーヌさんにお話を伺いました

私達はマリ・クリスティーヌさんの講演会に参加することにより「アスベストが人間の身体にどんな影響をもたらすのか」学ぶことができました。

まず、アスベストとは昔から使用されていた蛇紋石や角閃石が繊維状に変形した天然の鉱石で無機繊維状鉱物の総称です。

化学物質に耐性があり、熱に強く、強靭であること、また安価で用途が広いために昔は非常に人気であり、どこでも絶賛されているほどでした。父によると、小学校の理科の授業で、火を使う実験にはアスベストを貼り付けた器具が、当たり前のように使われていたそうです。

ところがアスベストの繊維はとても細く、肺に吸い込むと肺がんや中皮腫などの原因となりとても危険です。発症までの潜伏期間が30~40年ときわめて長いのも特徴の1つです。

そのアスベストの被害例は、アスベスト工場の従業員は吸っていたアスベストが原因の肺の病で亡くなっていき、クボタというアスベストの建材をつくっていた工場でアスベストを使ったことが原因で工場の中で10年間で51名の方が亡くなっているということと同時に、住民5人も中皮腫になったそうです。2005年11月には85人見つかり大きな社会問題となりました。これをクボタショックといいました。

私はアスベストの事をこれまで全く知りませんでした。家や工場等の建築物に当たり前のように使われていて、学校の教材にまで使用された物質が人の生命を奪うことがあるなんて、信じることができません。とても恐ろしい事だと思いました。私は母にも尋ねました。

「お母さんアスベストって知ってる?」

母の表情が一瞬曇りました。母はクボタショックのあった尼崎市に隣接する伊丹市の出身で、この恐ろしい事件についてよく知っているそうです。

1995年に発生した阪神淡路大震災の時には多くの住宅や工場、歴史的建造物が倒壊し多くの被害をもたらしました。生まれたばかりの赤ちゃんから病気で寝込んでいるお年寄りまで、たくさんの人が倒壊した建物によって命を奪われ、崩れた建物からは大量のアスベストが飛散しました。住民やがれき撤去の作業員の方がそれを吸ってしまったことでアスベストの被害にあった人もいたそうです。

私の父は神戸に生まれ育ちました。父にも震災の時のアスベストの事を尋ねました。「家ごと燃えたんと違うかな」と笑っていましたが、やがて真面目な顔になり当時の事を振り返りながら話してくれました。

父と祖父母、里帰り中の伯母達は震災で焼け出され、諏訪山の伯母の家で避難生活を送っていたそうです。震災当日からしばらくの間は余震が続いて夜寝るのが怖かった事。震災から数日後に三宮の北側で大きなビルが倒れて、フラワーロードをふさいでしまった事。復旧工事が始まるとそこら中ホコリだらけで、目も開けられないほどで、アスベストの問題が大きく報道されるようになった事を話してくれました。不織布のマスクは当時はあまり無く、給食当番さんみたいなマスクをするか、それもなかなか無いので、タオルを巻いたり、ハンカチや布を口に当てて急ぎ足で倒壊した建物の間を移動していたそうです。この話を聞いて、アスベストの繊維がすごく細い事を思い出して、どれだけたくさんの人が倒れた建物から飛散したアスベストを吸ってしまったのだろうと考えて怖くなりました。今もまだ潜伏期間は過ぎていません。これから肺ガンや中皮腫になる人が増えるかもしれません。

マリさんは阪神淡路大震災の発生直後に神戸市でボランティア活動をしました。マリさん達のボランティアグループは子どもたちがアスベストを吸わないように、NGOという密閉力が強いマスクをたくさん作製してほしい、とマスク会社に頼んで作製してもらいました。そしてマリさん達は8時間かけて東京から兵庫県にマスクを届けに行きました。

父にマリさんの話をしたところ、何度も大きく頷きながら聞いていました。震災の時は、ほんとうに沢山のボランティアの人達が日本中だけではなく、海外からも駆けつけてくれて様々な救援活動をしてくれたそうです。食料や衣類等の生活必需品を届けてくれた人達、通訳ボランティアの皆さん、獣医さん、敷地内の瓦礫を撤去するボランティア、等々。

震災のように、たくさんの人々が困難な状況になった時、ボランティア活動で支援をすることで、被災した人達の生活が少しでも早く元に戻れるようにすることがとても大事だと思います。

文：稲岡志帆